
♪どれみふぁそったくん♪

～子どものためのアウトリーチ～

第1章 プロジェクトの概要など

1. プロジェクトの名称、目的など

(1)名称

♪どれみふぁそったくん♪

～子どものためのアウトリーチ～

(2)目的

地方の小学校、及び福祉施設の子どもなど、普段生の演奏を聞く機会の少ないと思われる子ども達に向けて出張で演奏会を行い、子ども達にとってよき音楽体験となる機会を提供する。

ただ聴くだけの鑑賞会にとどまらず、楽器のしくみや音楽の歴史について知るなど学習の面を持ち、生涯学習としての視点を意識し音楽に関わることのできる場面を設けるなど、よき音楽体験として子どもたちに変化をもたらす機会となり得るよう留意する。また、現場のニーズに答えられているか、学習の面はあるか、参加型であるかという3つの視点を意識した企画をどこまで実施できたか、実践を通して報告する。

例年、大学近辺の児童館への訪問演奏を主に行い、幅広い年齢層の子どもたちに生の演奏を聴く機会を提供していたが、今年度はCOVID-19の全国的な感染拡大に伴い、感染予防の観点から小学校や児童館、福祉施設などへの訪問は控えることとなった。来年度以降の活動再開へ向け、前年度までの課題解決や、新たな企画の提案、演奏練習などを行った。

(3) 方法

- ①今年度は来年度以降に向けた企画の発案などを行う事が主な活動内容となることをふまえ、構成員全員と個別に面談を行い、今後の活動内容を決定する。
- ②訪問を実施する時期と訪問先を仮定し、企画案を作成する。
- ③本活動が掲げる3つの視点の内、「学習の面はあるか」、「参加型であるか」の2つで企画を評価する。

2. 代表者および構成員

・代表者

高垣実久 音楽領域専攻3回生

・構成員

上道 栞 音楽領域専攻1回生

小山夢希 音楽領域専攻1回生

加藤祐菜 音楽領域専攻1回生

鶴丸優月 音楽領域専攻1回生

溝渕夏樹 音楽領域専攻1回生

吉本千紘 音楽領域専攻1回生

3. 助言教員

田邊織恵先生（音楽科）

4. アウトリーチについて

Out（外へ）reach（手を差し出す）という意味の英語である。元々社会福祉の分野で行われる地域社会への奉仕活動や教育普及活動などの意味で用いられていた。現在では、現場へ出向いて活動する「訪問○○」「出前○○」といった受け手のニーズに合わせた取り組みも指す。⁽¹⁾

音楽分野でのアウトリーチ活動とは、音楽家や音楽団体などが音楽に普段触れる機会の少ない人々に働きかけ、音楽を普及することであり、さらに提供者と享受者が対等な立場で一緒に楽しむという双方向的なスタンスが特徴である。

第2章 内容や実施経過など

1. 活動内容

- (3月) 4月25日に実施予定であった「歌とお話の会」に向けて、対面での打ち合わせを行い、プログラムの確認と現場のニーズを確認した。本企画は感染症の流行により中止となった。
- (10月) 個別面談の実施を行った。その結果から、企画班と演奏班の2班にメンバーを分け、会議を行った。また、前年度までに出た課題等も踏まえ、2班の活動予定と活動内容を設定した。
- (11月) 10月に設定した活動内容に合わせて、会議を行った。企画班は、「幼稚園」「小学校1～3年生」「小学校4～6年生」の3種類の対象を設定し、季節に合わせた活動を企画した。演奏班は、訪問演奏を行う際に来年度実施してみたい曲を話し合い、必要人数や楽譜の有無等を調べた。
- (12月) 助言教員である田邊先生にご協いただき、「ドレミパイプ」による合奏練習を行った。

2. 感染症予防

(1) 会議等に関して

本年度は訪問を伴う活動を控えたため、構成員7名と会議等を行いながら活動を進めることとなった。活動に際し、複数名が一室に集まり密となることを避けるため、二つのグループを編成し、個人で行う作業を増やした。また対面で会議を行う際の活動時間は、30分以内を目安とした。

(2) 演奏練習に関して

前年度までに訪問演奏等で使用することが多かった「ドレミパイプ」という楽器を使用して合奏練習を行った。「ドレミパイプ」は、プラスチック製の打楽器であり、マスクを着

けた状態で他人と接触することなく演奏できる楽器である。また、練習は演奏室で行い、入室前後の手指・ドレミパイプの消毒を行った。加えて換気のため、ドアを解放した状態での活動となった。

第3章 結果や成果など

(1) 企画に関して

本年度は「幼稚園」「小学校1～3年生」「小学校4～6年生」の3種類の対象を設定して活動を企画した。

①「幼稚園」

幼稚園では、歌や演奏を用いた絵本の読み聞かせや紙芝居に関する企画を考えた。例としては、エリック・カール原作の《はらぺこあおむし》や、水田詩仙 訳詩、鈴木幸枝 絵の《山の音楽家》などが候補としてあげられる。加えて、パネルシアター等も音楽付きの作品が多く、楽器を用いた活動を行いたい。

また、ダルクローズが発案したリトミックによる活動も候補に挙がったが、リトミックは継続的に行う事が重要である点や、リトミックがもつ人格形成教育的な側面に十分適した活動を行うだけの知識や経験の不足が問題点となった。

②小学校1～3年生

小学校1～3年生では、オルフ楽器の体験を企画したい。オルフ楽器とは、ドイツの作曲家カール・オルフが提言した教育理念であるオルフシステムに用いられる楽器の事である。この企画では、すべての音板を取り外すことができる木琴や鉄琴を使用したい。こちらが短めの楽句を反復するオスティナート⁽³⁾を奏で、それに合わせた即興的な旋律を子どもたちに奏でてもらい、演奏活動を行う。この企画は、オルフ楽器の木琴や鉄琴に取り付ける音を工夫することで、沖縄旋法や日本音階など曲

に特色を持たせることもできるので、その点を生かした活動を行いたい。

③小学校4～6年生

小学校4～6年生では、打楽器を中心とした楽器体験や、子どもたちが学校でリーダー等を使用して演奏している曲の合奏が企画された。また、楽器の音色そのものを比較聴取できる企画として、同じ曲を様々な楽器でリレー的に演奏する企画も提案したい。

加えて、指揮を体験できる企画も提案されたが、この活動では演奏者の確保や、参加人数が多いことによる感染症対策の難しさが課題となった。

(2) 演奏に関して

来年度以降も感染症対策が必要になるであろうことを考慮し、消毒が簡単に行えて、道具を他の人と共有せずに、ディスタンスを保ちながら演奏できる楽器として「ドレミパイプ」を選択した。子どもたちに披露する演奏として『聖者の行進』や『ミッキーマウスマーチ』等を構成員と共に練習した。また、「ドレミパイプ」はCは赤、DはオレンジEは黄色という風に各音で色が異なる。そのため子どもたちを対象に「ドレミパイプ体験」を行う際には、階名ではなく色を伝えることで、楽譜が読めない子どもや、階名が分からない子どもの演奏をサポートできる。しかし、このようなサポートは視覚に障害がある子どもへの配慮が難しいという新たな問題も発覚した。様々な困りのある子どもへの配慮は、来年度以降の課題としたい。

第4章 まとめと反省、今後の展望など

(1) 前年度の課題

前年度の課題は「奏者の確保が難しい事」、「活動場所に偏りが見られた事」、「情報共有不足」の三点であった。一点目と二点目に関

しては、本年度は施設等への訪問を実施していないため、来年度に持ち越したいと思う。三点目の「情報共有不足」に関しては、今年度は活動内容によって班を分けて活動し、それぞれの進捗や今後の動きをLINE等を用いて全体に共有することができたと思う。

また、活動を行う際に使用する小道具等に団体のロゴを使用したいという意見が2年ほど前からあったため、ロゴを作成した(図1)。

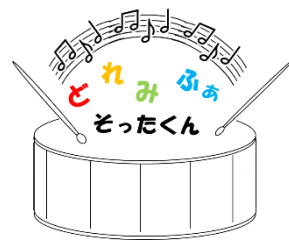


図1 ロゴ

(2) 反省と今後の課題

本年度は、実際に学外に赴いての活動がなかったため、これまでの活動や新たな活動に関して考える一年となった。その中で、我々が掲げる3つの視点である「現場のニーズに応えられているか」、「学習の面はあるか」、「参加型であるか」をバランスよく叶える難しさを感じた。また、様々な企画を立案していく中で、いくつか課題も見つかった。

一つ目は配慮が必要な子どもへの支援を考慮する事である。本団体はこれまで、配慮が必要な子どものいる場で活動を行ったことがなく、今回ドレミパイプの演奏活動を企画した際に、色覚に配慮が必要な子どもへの配慮が必要であるという課題が見つかった。このような場合も、現場からの要望がある場合には、訪問先との話し合いの中からこちらが実施できる活動をくみ取っていききたい。

二つ目は感染症対策をしながらどのように「参加型」の活動を行うかという点である。飛沫感染を防ぐという観点から、歌唱や管楽器を用いた演奏活動などが制限される中で、どのように参加型の活動を実施し学習の面を

もたせるのか、検討が必要である。貸出や学外への持ち出しができる弦楽器がほとんどないことから、打楽器を中心とした活動が予想されるが、マレットや楽器の使いまわしを防ぐ仕組みを考えなければならない。

以上の点を踏まえ、今後の活動に活かしていきたい。

<参考・引用文献>

- (1) 松本 菜摘,河添 達也 (2015)「小学校音楽科における「教育プロジェクト型アウトリーチ」の授業開発研究」『島根大学教育臨床総合研究』島根大学教育学部附属教育臨床総合研究センター, pp.181-190
- (2) 林睦(2009)「音楽のアウトリーチ活動に関する一考察—日本における導入10年と今後の課題」『音楽教育学の未来』音楽之友社, pp.280-290.
- (3) 平凡社『音楽辞典 第一巻』1954年、300頁。